

も一寸と、其人々の大兵小兵に随ひて、一寸に長短を爲すゆゑ、背の何所の寸は誰にても四寸は四寸と定め置、又足の何所々々の寸は、誰にても何寸也と定めて違ふ事なし、既に其人々の臂に競べて、足袋を作ると云ふ事あり、是らこそ同身寸とも云べけれ、先に物さしを一種こしらへ置て、大兵小兵、其人々に随て、寸の數に多少有るは骨法と云ふにてはなき也、此物さし曲尺にて八寸計りあるうちへ、十分十寸を置たるを以て見れば、前の夏の尺なるべし、かの黄鐘管の長さ也、唐の武徳四年に錢を鑄る、開元通寶是なり、此錢は今爰にあり、日本の秤にて、重さ一各目有り、又日本曲尺にてわたり八分有り、十錢並べて八寸有り、曲尺の八寸は夏尺の一尺也、曲尺八分は夏尺にて一寸なり、然れば此開元錢一文は、彼物さしにて一寸なる故、一寸を一文と唱へて、足袋を商ふと見へたり、開元錢のわたりに合ふ故のことば成べし。

〔數學類聚上〕本朝流俗に菊ざしと云ふて、一種の物さし有り、是は菊の花の寸をさす物さしにて、其長さを見るに、日本曲尺にて六寸餘ばかりある也、或人は是を陶淵明が用ひたる尺也、晉の尺也と云ふ、又彭祖の用たる物さしにて、漢の尺也と云ふ、淵明菊を集めて、花の隱逸なるを翫びしと云ふ事有、陶淵明は大隱の賢人にて、虎溪に隱居して、獨り摘菊を樂しみし事は聞及ぶ也、是は野生の菊花を賞翫せし成るべし、花壇花欄に齒し、己れが作り立て、咲たる菊を、かの物さしにて、花のわたり一尺有か、或は一尺に一寸越えたか、二寸に至りたかなど、て他人の持たる花よりも過分に大きな事を悦びて、勝を得たりなど、自慢したる事は聞及ばぬ事也、又彭祖ハ灑縣山江配流せられて、菊を友として、八百歳を壽せりと云ふ事は、小兒も知るなれども、是は周の穆王の枕をば持居たりしなれども、物さしを持たるは晝にも見たる事なし、彼物さし、日本曲尺にて六寸餘有るは、いかさま武王八寸を尺とすると云ふ尺にて、黄鐘管の長さを五段として、段を捨たる尺有り、前に委く出しあらはしたる也、是夏尺の八寸にて、日本曲尺に六寸四分なり、漢尺と